

同廣中師について

秋 山 智 孝

一
江戸時代の中頃吾が教団は隆盛その極に達したが反面漸く僧風の弛緩墮落の兆が生じて来た。かゝる時に當り中正日護本覺日英艸山元政同廣日中等の諸碩徳が相次いで現れ法華律を唱導し宗風の刷新に努められた。

同廣日中師の傳記は延山才三十六代六牙潮師の本化別頭統紀に載せられてある。又身延山史にも載せられてあるがこれは多分潮師の別頭統紀に據つたものと思はれる別頭統紀によれば

師諱日中字省已竹山和尙莫逆年少竹山三歳也後入身延山深晦蹤呼正住院同廣博學多識詩賦文章人皆推之師十二歳之時題二戸樞一詩曰好惡因一軋二心斯爲二之樞一守守堅守出入備莫疎又題書帙詩曰生時一赤身死日骨猶レ摩勿謂是吾有看過旅店珍唐元寶見爲二神童一又四威儀詩曰山中住絕二世塵一所適用豈憂レ貪石歛枕艸施レ茵一睡百情泯余二三首潮忘レ之平生著述多而終不

留レ之唯有二高租贊詞一人レ噲二灸之一生過レ中不食持律嚴密而終焉元祿一四年辛巳正月十九日泉沙界妙法寺而化矣壽七十又二とある。

二
右によれば日中師の出身地は何処であるか不明であつて他の文献にも見当らない様である。艸山和尙の莫逆とあるけれども艸山集の中には關係ありと覺しきものは見当らない。

若し元政上人と深交があつたとしたら艸山集の何処かに關係ある箇所があつて然る可き様に考へられる。下山本國寺にある日中師御所持の法華經一部は元政版の初版本であるがそれには日中師の名前が記されてあるだけで外には何も書いてない。

統紀に元祿十四年七十二歳、泉沙界妙法寺に化したと

あるが、これによると寛永七年の生れになり、元政上人は元和九年の生れであるから統紀説の三歳は間違ひで七歳年少と云ふ事になる。泉沙界の妙法寺は現存して居る寺と同じであるかどうかは不明であるが現在の妙法寺にはその様な事は傳はつて居ない由。

統紀には後身延山に入り正住院同廣と呼ぶとあるが、本国寺にある一軸の身延日脱上人が正住院落慶に際して書かれたものに依れば上段に

貞享甲子季春落慶正住院此院也正已信任同志唱之余嘉納而和之故取二子字以爲号矣已而裝此書軸置之院裏蓋令將來知院基之開于三良緣也願勤經王誦誦愍報四恩助大法廣布遍利三有且酬祖會冥々之積德祈末葉永々之茂盛是三者同心開基之志願也其迹雖微其志大深後世有心之人見之最負昌此院恪勤弘此葉寔是三者同心之良友也豈但三者良友或三宝神天必憐此人豈但一世良友或諸佛會中數々相遇嗚呼此友也吾今恨先世不相看故留此影諭此志以擬其面話不亦宣乎伏乞宗祖大菩薩七面大明神冥加威神速至來際延囑日脱三三名字並書之

とあり中段には脱師の像を画き像の右には延山三十一世左には一円院日脱とあり下段には右に同廣日中師の像があり像の右に正住院沙門同廣日中法師左には正巳子云者

其号也とあり左には澁谷日雅の像があり攝陽難波優婆塞澁谷信住日雅とある。

右によつて正住院の縁起は明瞭に知られる、日脱上人と日中師との關係は如何にして結ばれたかは不明であるが三者同心開基志願と述べ三者良友也とあるのを見ても只ならぬ關係にあつた事が推測される。日中師の身延山は確實な事は分らぬ、少くとも貞享元年以前と考へられる。脱師が貞享四年祈禱堂、同時に三十六ヶ坊を建立し晝夜不断に法華經を誦誦せしめた事は有名である。

貞享元年正住院の落成と共に始められた日中師の不盡誦持の法音がやがては貞享四年の祈禱堂建立へと脱師の心を動かしたのかも知れない。潮師は統紀に「余の三首潮之を忘る」とあるが、潮師の出版になる「身延山図經」の身延山諸堂之中に、

身延山陽成

妄想消除拜三祖堂一 白雲出岫引儂行
法身相好碧山色 無作妙覺算水声
信地堅剛三德聚 真那彷彿六根清
個中自有別頭意 妙覺十号一念成

又

本地唱題成二本因 凡身全是覺皇身

定中自不識余在レ法界ニ融往ニ処ニ眞

とあり三首の中の二首に入るものと思はれる

又統紀に唯有高祖贊詞一人ニ人ニ會ニ之ニことあるが、これは本化別頭高僧傳の卷頭に揚けられてある高祖贊を指すものと思はれる。高僧傳のは丙寅の秋即ち貞享七年に日中師が贊をした様にあるが下山本國寺に、脱師筆宗祖の御影の上の、日中師の贊には元祿七年仲秋日とある。今兩方を比較して見るに

高僧傳

末法正導師蓮祖大菩薩影像贊

梵皇末法似ニ周季ニ

諸候強僭ヲ王室衰

慈覺有レ夢挿ニ弓矢ニ

誰率ニ舊章分尊卑ニ

吾祖降ニ靈ニ東海濱

慈門就レ禪建ニ宗儀ニ

義勝何似ニ莊嚴味ニ

德秀不レ訛ニ勢家威ニ

孤立彈折ニ仁與ニ珍

五大望レ風弘法隨

慧心法然西僧正

慈覺下堂礼掃地

義勝不須壯嚴味議
德秀不何訛族姓威

叱嗟碎易塞路披

浩然氣魄回天力

龍象蹴踏非ニ驢ニ爲ニ

聖一興正宗禪納

真諦盛ニ世建ニ長時

一擲衆雄ニ沒ニ端倪ニ

睥睨豪族犯ニ禍機ニ

惡罵謔ニ戮ニ皆戲謔

悲母何レ嗔病愛兒

但恐鷲嶺託ニ付ニ虛

東征西伐終告成

創ニ制ニ禮樂ニ鴻業垂

和レ蝦和レ蜎奏ニ鈞天ニ

被レ髮濡レ足枚ニ漣漣ニ

低唱ニ題号ニ徹ニ異域ニ

工ニ圖ニ曼荼ニ超ニ三支ニ

從レ斯ニ良緣ニ徧ニ視ニ聽ニ

枯田佛種信雨滋

津恰且指万年外

円常実教当ニ無レ期

同廣中師の墓は身延南谷即ち今の深敬病院の南端にある

睥睨椎豪犯禍機

和蝦應蜎奏鈞天

円常廣慈当無期

昭和二十年の水害の際山崩れの爲埋没したが網脇院長に依り発掘され舊状に復した。

統紀によれば「平生著述多し而も終に不留く」とあるが身延山史には、「いろはの抄」「法華音義」「本朝鑑名集」等の著あり今は失はれて見られぬとあり従つてそれらの著書が如何なる内容であつたか全然知る事が出来ない。中師の書かれたものとして下山本國寺には曼荼羅二幅と行業記一卷とがある。曼荼羅は二幅共に拇印が捺されてある事と日中の印が捺されて居るのが變つて居るところである。行業記は日中師が万治二年より身延入山直前の天和四年（貞享元年）まで即ち三十歳から五十五歳に至る二十六年間に亘る読誦唱題の巻数を記されたものであり、遺徳の一端を窺ふに足るものあり、また感ずる事は一度に淨書したものかどうかと云ふ事であるが墨色書体を細かく研討した上でないと、断定した事は云へない。

行業記に依れば平均一年間に四百三十一部を読誦して居るが最初の八年間は部数も極めて少い。それ以後は次第に増して天和元年には部経七百六十六部、自我偈一万三千百四十六卷、普賢呪三万五千四百卷、多聞呪二万七千六百卷となつて居る。注目すべき事は寛文四年から九

年に至る間毎日關さず釋尊の名号百辺を唱えた事である残念な事に行業記は貞享元年で終つて居りこの年は丁度正住院の開かれた年に当り愈々これから前にも増して読誦三昧に入られたのであるが、その間の消息は知る事が出来ない。

三

日中師がなくなつてからの正住院はどうなつたか細かい点は不明であるが、文久三年十月西谷檀林溪舌寮湛道の溪舌寮修復の爲の勸莫の文書によれば、

当寮は本正住院日中聖人建立の溪舌寮也古寮朽損を蒙る故一中院日如上人葉潮源院日香上人並に本妙院日理上人に命じて此地に引移して学寮となすものなり」とある如く移転して西谷檀林の学寮となつたことが知られる。又室曆八年六月には修善除政雲日報上人が再建し今文久に至り露落窮々雨は床頭に点し風は観音をたたくとあり三度修復の余儀なきに至つたと書かれてある。

猶同文書には

当庵開講之昔は負笈の客席に溢れ戸外之履常に充てりとあり中師の遺徳を慕ひ雲集した有様がしのばれる。溪舌庵なる名稱は日中師の文書の中には見られないが恐らく身延の清流のほとりにある故中師自身をそう云はれたと

思ふ。

願はくば一読の諸聖折あらば身延深敬園内の日中師の墓

前にも詣でられん事を。

「梵唄」に口傳された五調子とその旋法

(延山流の奥義たる陰旋陽旋の分析研究)

石 川 是 行

一、序 論

1、声明梵唄に就いて

2、十二律

3、五声音

二、本 論

4、呂 律

5、五調子

6、梵唄に相伝された五音及び五調子

三、結 論

7、延山流陰陽の旋法

(本稿は以上を概説せり)

身延に伝わる声明は、総本山久遠寺才十一世行学院日朝上人に濫賜、廿二世日遠上人代に至つて特にその興隆を見たて伝え、現に大野山本遠寺には日遠上人筆の声明本が宝物として格護され、斯道の研究資料として重きをなしている。

身延の声明本は通稱「梵唄」と呼び、久遠寺年中行事